

モーツアルトのクラリネット協奏曲

中央区・中洲支部 川畠平一郎

NHKの「名曲アルバム」は1976年に始まり、古今東西の名曲をゆかりの地で収録した映像と共に5分間に収まるよう編集したクラシック音楽番組である。

先日この番組で「モーツアルトのクラリネット協奏曲」が放送された。クラリネット：金子 平、指揮：円光寺雅彦、東京フィルハーモニー交響楽団、ウィーンのモーツアルトゆかりのシュテファン大聖堂やシェーンブルン宮殿等の映像と共に流れる僅か5分間の演奏であるが感激して聴いた。

Anton Stadlerはウィーン宮廷楽団に仕えていたクラリネットとバセットホルンの名手で、クラリネットの低音域が広がるよう改造し非常に美しい音色で知られていた。Stadlerの演奏を称賛し親しくなったモーツアルトが彼の為に作曲した唯一のクラリネット協奏曲である（クラリネット五重奏曲もある）。モーツアルト35歳、最後の協奏曲となった。

当時妻は療養の為温泉地に滞在中で、一人ウィーンで暮らしていた。妻への手紙にもあるように「何というか心が空っぽで何かへのあこがれはあるが満足させられない、心の空洞を感じる」という心境であった。

既に死を感じていたころなので、この曲にも虚無感と未だ死にたくない・新しい曲を書きたいという焦りを感じさせるものがある。

Berlin Phil Digital Concert Hall（有料アプリ）のアーカイブでBerlin Phil.の首席クラリネット奏者Wenzel Fuchsが演奏するこの曲を聴いてみた。この難しい曲を見事に吹いており、Berlin Phil.もそれに応えて完璧の演奏である。然し、モーツアルトの死を前にした虚無感・もっと生きたいという焦り・その何かにす

がりたいという最後の気持ちは感じられなかった。

クラリネット：Gervase De Peyer（1926年ロンドン生まれ、2017年没）、指揮：Peter Maag, London Sym. Orchestraが演奏するこの曲をハイレゾでDownloadしたのを聴いてみると、この晩年の（僅か35歳であるが）侘しさと諦念の中に崇高ささえも感じられる清らかな調べにうっとりとして時を忘れる。

然し暗さを感じない・リズミカルな演奏なので、車のオーディオに入れて運転中心の安らぎを感じながら聴いている。

第一楽章

アレグロ イ長調 4分の4拍子、ソナタ形式

第二楽章

アダージョ ニ長調 4分の3拍子、三部形式

第三楽章

ロンド（アレグロ）イ長調 8分の6拍子、ロンド形式